

ワークシート(第2章 EPISODE)

EPISODE 2-1

● 突然「よい子」でなくなったGさん

小学6年生のGさんは、これまで学校でも家でも「よい子」でした。いつも反応がよく、授業には熱心に取り組み、仲間や大人の手伝いをよくしていました。3人きょうだいの長子で、親があまり目をかけられていない面はありましたが、本人は文句を言うこともなく、いつも「お姉さん」をしてきていました。親はその様子を見て「やっぱりお姉ちゃんだね」と我慢強さや面倒見のよさを褒めていました。

しかし最近になってGさんのクラスにいじめの問題が起こり、担任がいじめられた子たちに話を聞くと、どうやらいじめの首謀者はGさんらしいことがわかりました。担任がこのことについてGさんの親に伝えると、親は驚きまったくその事実を受け入れられないという様子でしたが、クラスに迷惑をかけている以上親として何もしないわけにはいかないと言い、その日Gさんを問い詰めたといいます。するとGさんはみたことのない形相で親に対する暴言を吐き始めたそうです。はじめてGさんのそんな姿を見た親は、どうしていいかわからなくなってしまいました。

EPISODE 2-2

● 母親に対して暴言・暴力を示すHくん

Hくんは、小学6年生になってから、学校に行く前の機嫌が悪く、遅刻や欠席が増えています。5年生の頃クラスの友だちとのトラブルがあったことから、母親はHくんが学校に行くことにストレスを感じていると考え、しばらく見守る構えで、遅刻や欠席について^{とが}咎めないようにしています。

しかし、朝早く起きてきたのに、いざ準備を始めるともたもたして遅刻したり、やる気がなくなって欠席になってしまうということが数回あってから、母親は夜寝る前に「明日は学校に行く？」といった声かけをするようになりました。朝につまずかないようできることを準備しておきたいという思いで、プレッシャーにならないよう気をつけながら声をかけていました。Hくんはその頃から、何かにつけ「うるせえ」などと声を荒らげたり、ときには母親の腹部を殴ったりするようになりました。

母親ははじめ、いわゆる反抗期にも重なっており、この時期の男子の行動としてはそこまで異質なものではないと捉えており、また、暴言や暴力の後「ママごめんね」とすり寄ってくることから、よほど虫の居所が悪かったのだと気にとめていませんでした。しかし、暴言や暴力はエスカレートし、母親は、身体が大きくなり、力も強くなってきているHくんの行動をいつまで受けとめきれるか不安になってきました。

● 本章での学びを踏まえて、EPISODE 2-1, 2-2を次の視点で検討してみましょう

- ① GさんやHくんはなぜ他者に否定的な態度・行動をとるようになったのでしょうか。
- ② 親や教師はGさんやHくんの心に寄り添うために、これからどうすればよいでしょうか。愛着や情動知能の理論から考えてみましょう。
- ③ GさんやHくんはそれまでの発達過程において、どのような支援を受けられるとよかったですか。

(記入欄)

① GさんやHくんはなぜ他者に否定的な態度・行動をとるようになったのでしょうか。

② 親や教師はGさんやHくんの心に寄り添うために、これからどうすればよいでしょうか。愛着や情動知能の理論から考えてみましょう。

③ GさんやHくんはそれまでの発達過程において、どのような支援を受けられるとよかったですか。

記入者名：

(日付： 年 月 日)